

徳川黎明会所蔵『豊国祭礼図屏風』について  
-岩佐又兵衛とその工房に関する一考察-

筒井忠仁（京都大学大学院）

『豊国祭礼図屏風』は、慶長九年（1604）の豊臣秀吉の七回忌に際して行われた豊国大明神臨時祭礼の様子を描いたものである。豊国祭礼を描いた屏風はいくつか知られているが、もっとも初期の作例と考えられているのが、慶長十一年（1606）に豊臣秀頼によって奉納された豊国神社所蔵『豊国祭礼図屏風』である。狩野内膳の落款を持つこの屏風は、計算された構想のもとに事物を整然と配置するとともに、祭礼の威儀を忠実に記録しようとする意図が見られ、一つの規範性を獲得することに成功して、後の作品に多くの影響を与えている。徳川本『豊国祭礼図屏風』もまた、画面の構成やモチーフの選択において豊国神社本を強く意識しているが、描写法の相違によって、対照的とも言える印象を見るものに与えている。そのため、これまで徳川本について論じるさいには、常に豊国神社本との比較が行われ、豊国神社本の秩序だった構成や静謐な画面と、徳川本の雑踏や乱舞の混沌としたさま、あるいは彩色や文様の描写に見られる過剰さといったものが対比されてきた。

こうした言及の仕方は、確かに徳川本の一つの特徴を良く浮き彫りにしている。しかしながら、定型化された文言によって、この屏風に対する漠然とした見方が固定化してしまい、屏風の細部に対する注意が疎かにされてきたことも事実である。仔細に眺めるならば、この屏風は混沌では捉えきれない様々な要素を含んでいる。筆者はこれを工房制作という観点から考察していく。具体的には、この屏風をいくつかの場面に分け、それぞれの描き手の違いについて見ていき、それらを岩佐又兵衛の基準作、及び工房作品と比較することで、個々の部分の描写の特徴を把握する。例えば、祭礼の主要な場面である風流踊りの描写は、色数、衣装の多様さ、踊り手の姿態の躍動感、表情の描き分けの巧みさなどが、極めて豊かな表現をもたらしているのに対し、それらを見物する棧敷席の人物群は、類似した横顔の人物が多く描かれ、幾分単調さを見せている。また同じ祭礼の主要場面であっても、社家の騎馬行列の場面は、人物表現が典型的で、線描にぎこちなさが見られるなど、場面によって描写の密度に相違が見られる。こうした事実は、おそらくこの屏風の描こうとする主題と関係し、注文主について考察するきっかけを与えてくれるであろう。また、屏風が制作される際の工房の分担の仕方についても示唆を与えてくれる。工房制作のあり方に着目するのは、個々の作家の枠を超えた、近世初期における工房組織の様態への関心からである。これまで作家や作品ごとの工房の制作方法についての研究は多くなされてきたが、それらを相互に比較検討し、体系的な工房組織論を構築する試みはない。個々の工房について考察するためにも、全体的な枠組みは重要であろう。本研究は、いわばその個別研究の一つといえる。